

# 高山の文化を高めた人々

81

## 「隙間を埋める」 玉 賢三

山本純一

スタ）ができる前は、西口のヨドバシカメラ前から高速バスが発着していた。いくつもの路線を走るバスが到着するなかでひととき目立ったのが松本からやってきたバスだった。ボディを彩る水玉と原始的な様相をみせるくねった草花、そしてビビットな色彩。群衆の目を釘付けにした絵は草間彌生が描いたものだった。

陣屋前の朝市が片付けられると広場は急に閑散とした。そんな時、そのバスは赤い橋を渡ってこちらへと走ってきた。疾走しているというより、頑張つて走っているという感じのボンネットバスである。鼻を突き出したバスは今の子どもたちの目にどのように映るのだろうか、などと考えるからバックの中をまさぐった。

カメラ付き携帯をと、焦れば焦るほどボンネットバスは遠ざかっていき、八軒町の角を曲がると、その先へと消えてしまった。

十年前だろうか。東京の新宿にバスターミナル（愛称バ



金沢21世紀美術館にて

その時も携帯電話を片手に僕はバスを追っていた。もし、玉賢三さん（以下玉さん）がデザインしたボンネットバスが新宿を走っていたら、そのいでたちは見る人に優しさ、笑顔と、かつてどこかで聞いた懐かしいエンジン音をふりまき、都民の格好の被写体になったに違いない。

さてその玉さんだが、あの人は終始イラストレーターに徹し、透明感のある水彩で女性や屋台、闘鶏楽や獅子、そして職人さんや映画俳優たちの似顔絵を描いてきた。どんなモチーフでもリアルに綺麗に描いてくれるものだから、仕事で古いヨーロッパ車を描いて欲しいとリクエストし、その出来栄えにも驚いた。かと思えば、岐阜の金華山を情感漂う東山魁夷のブルー調で描い



濃飛バスのボンネットバスにイラストを描く。1992年制作

てしまう技なども隠し持っていた。面相筆を持たせれば描けないものがないという具合だから、風合いのある玉テイストに惚れ込んだアートディレクターは県内だけでなく、東京で活躍する著名なデザイナーも玉さんを知っていた。

ところで僕の友人に写真かと見間違えるほど精緻に描くイラストレーターがいる。でもそれは8Kの高密度TVを見てるようで、モチーフにもよるが精緻な絵は心が入りこむ隙間がない。ところが玉さんの絵は近づくとき筆のタッチは荒く、意外とざっくりとしている。それにもかかわらず、離れて見るとなめらかで艶やまで感じ取れるのだ。人の目は筆の書き残しを想像で補えるのだろう。だから玉さんの

絵はいつまでも安心して眺めたいられる。

ちよつと昔に遡るがデザイナーの全国公募として有名な日宣美。そこで受賞をした玉さんは、いつとき高山を離れ、勉強するために上京しようと考えたという。（一九五五年）

「子どもや奥さんを連れていく覚悟はあるのか」と、師に聞いたとされ泣く泣く上京を断念。その後、病を患い公募作品も次々と落選。その頃の玉さんの眼差しは地元より東京へと向き、グラフィックデザイナーの亀倉雄策や、田中一光の洗練された世界を追っていた。その後、飛騨の民具のダイナミックな骨太感や闘鶏楽に代表される飛騨の祭礼美に気付かされ、十年後日宣美で再び受賞を果たした。

隙間を埋める、稀有なイラストレーターはこうした山をいくつも越え、飛騨に高潔な美を残したのである。



玉賢三作  
ポスター原画  
(72cm×103cm)  
「飛騨民俗館・そり」  
1965年制作、  
日宣美展出品  
入選作品